未来のコンパスProject

［新たな可能性］

このプロジェクトは、京都のマスメディアが中心となり、京都の人たちの力を結集して、みんなで前向きになれるきっかけをつくる啓発キャンペーンです。特別寄稿［新たな可能性］第1回は、臨床心理学者の河合俊雄さん、指揮者の広上淳一さんに寄稿してもらいました。―この先の、その先の、新しい日常へ。

主催＝未来のコンパスProject実行委員会
（京都新聞／KBS京都ラジオ／エフエム京都）
後援＝京都商工会議所
（一社）京都経営者協会
（一社）京都経済同友会
（公社）京都工業会
協力＝日商社

新しい文化的装置の共有が必要

河合俊雄　臨床心理学者

京都は不思議な町である。首都であるのに城壁を持たず、鬼門によって侵入者を阻もうとしていた。また中世の天災や疫病に対して、祇園祭によって対処しようとした。その意味では京都は、実際的で機能的というよりは非常にスピリチュアルな町であったと言えよう。

もちろん新型コロナウイルスに対して、科学的・政策的対処抜きで対応できるとは思っていないし、それは非常に重要であろう。しかしコロナ禍そしてコロナ後に関して、何らかの新しい文化的装置の共有が必要ではないだろうか。

日本古代史が専門の故上田正昭氏によると、平安当時の貴族階級は怨霊を祓おうとしていたのに対して、民衆はむしろ祭りを通じて怨霊のパワーをもらおうとしていたという。これは同じような厄災があっても、人によって全く受け止め方が違うし、またネガティブなものが、革新のパワーとなり得るということである。考えてみると、新仏教も厄災と戦火の後から生まれてきたし、このコロナウイルス禍も、これまでにない発想や取り組みのみならず、新しい文化や思想をもたらす起爆剤となってくれるかもしれない。実際のところ、今回の行動制限や対応を通じて、個人から世界のレベルに至るまで、当然のことと考えていたことが必ずしも必要でなかったり、それどころか全く間違っていたりすることが分かったのが多い。グローバル化と経済効率の優先、一局集中などがいかに脆弱なものか、枚挙に暇がないであろう。

私自身は心理療法が専門なので、そこから得られた示唆にふれてみたい。東日本大震災のときに「無常」がクローズアップされた。達成したものによって豊かさや幸福をはかろうとする人が、つまずきや喪失のダメージに弱いのに対して、無常をベースにしている人は、もともとないところが基本ラインなので、喪失に強いように思われる。今回のコロナ禍の行動制限についても、日本人の無常をベースにおいている強さのようなものを感じた。

新しい文化・思想の可能性について指摘したが、これはコロナ後の大きな物語であろう。しかし震災のこころのケアでの経験では、震災にこだわるのではなくて、一見すると震災とは関係のない、個々の家族関係、職場の人間関係の問題などにフォーカスできる人ほど状態がよくなっていった。つまり大きな物語ではなくて、小さな物語が大切なのである。

周囲のセラピストと、コロナ禍の自分のクライエントに及ぼした影響について簡単な緊急の予備調査を行ってみたところでは、平安時代の怨霊に対してのように、受け止め方がさまざまであることが分かった。100例くらい集まった結果では、コロナ禍のポジティブな影響の方がネガティブな影響を上回っていた。それは行動制限によって、家族といる時間が増えて、家族関係がよくなった、収入が激減して、重い腰を上げて仕事に出るようになったなど、小さな物語である。しかしコロナ禍・コロナ後の世界や生き方について、大きなヴィジョンを掲げるよりも、それぞれが自分の個別の小さな物語やニッチを見つけていく方がはるかに大切なのかもしれない。

心理療法では行動制限でクライエントが通ってこられないのが大きな問題となった。しかしそのために、これまでは抵抗があったのにオンラインによる心理療法が、世界中でおおいに進んだ。これは、人口が多くて地価が高い都市にオフィスを構えなくても心理療法が可能になるということで大きな変化をもたらすかもしれず、他のビジネスにも利用者にも通用することかもしれない。また京都大学こころの未来研究センターは、LINEメッセージによる企業単位の支援・カウンセリング事業を始めた。これも場所に縛られないこころのケアのあり方で、その場に一緒にいることによるサポートが大切であった世界から大きな転換を迎えているのかもしれない。

◎1957年生まれ。京都大大学院教育学研究科修士課程修了。Ph.D.（チューリッヒ大）、ユング派分析家。現在は京都大こころの未来研究センター教授・センター長。著書に『ユング』（岩波現代文庫）、『村上春樹の「物語」』（新潮社）、編著に『発達障害への心理療法的アプローチ』（創元社）などがある。

文化を大切にする気風を持つ

広上淳一　指揮者

© Masaaki Tomitori

コロナ禍が猛威を振るい、私たちは人類の生活、文明、文化のあり様を考え直さざるを得ない状況に追い詰められている。常に頭の痛い問題、例えば人種差別、格差社会、侵略思想、グローバル化など、世界の政治、経済、外交、教育、歴史観などに関わる課題も顕在化している。同時に、人間の中に潜む矛盾、偽善、欺瞞、詭弁、エゴイズムといった醜い本性をも浮き彫りにされてしまった。

それは、音楽を生業とする者にとっても無縁ではない。日本において芸術や音楽は一体人の役に立つのだろうか。この漠然とした疑問が、またしても大きなテーマとしてのしかかってきたのだ。2月半ばから活動停止を余儀なくされた世界中のオーケストラ、演奏家たちは、生活の困窮もさることながら、演奏できないもどかしさや人々との交流を絶たれた悔しさなど、計り知れないダメージを被った。そして、人間本来の脆弱さが、人々に閉鎖的思考や恐怖心を植え付け、ネガティヴなエネルギーを生み出してしまう。そのことをコロナウイルスから学んだと言えるかもしれない。

京都と京都市民は、世界レベルに達した京都市交響楽団というオーケストラを持っている。市民と共に歩み、一層身近で親しみあるオーケストラに近づけると思っていた矢先、このコロナウイルスの猛襲を受けた…。歴史的に見て、京都は音楽の都ウィーンとその成り立ちが似通っている。歴代の覇者、征服者が魅力を感じわが物にしたい、そう思わせる不思議な魅力をもっている街なのだ。魅力ある街は、文化を発信する中心地でもある。そういった環境の下で京都市交響楽団は、市民に大切に育まれてきたのだ。いまオーケストラは市民のために何ができるのか。心のレストラン、音で癒やす居酒屋、心に寄り添う音のカフェ、言葉は何でも良い。つまりは、オーケストラは市民の気持ち、心を捉えて離さない存在でなくてはならないのだ。人々の心を捉える、それはどんなことなのだろう。社会、地域、学校は、クラシック音楽に、そしてオーケストラに何を期待しているのだろうか。

日本は明治維新の頃、ヨーロッパ文化、文明を受け入れ、芸術はとてつもなく高尚なものというイメージで輸入された。この時、西洋文化に対する羨望と劣等感をも植え付けられたと言っても良いだろう。そして、このコロナ禍は、「芸術」という言葉の誤解を解き、真の意味を示さなければならないということに気付かせてくれた。音楽は、人々の身近にあり、衣食住のレストラン、ファミリーレストラン、居酒屋といった生活に根差した存在であることを伝える努力をしていかなければならない。そして、オーケストラは市民に愛されなければならない。オーケストラは、市民に親しまれなければならない。

音楽の特性は、「音」そのものにある。料理で言えば、食材を目や舌など五感で一瞬にして味わう儚さにも似ている。演劇で役者たちが演ずる姿にも共通項を見いだすことができる。時空の中で一瞬一瞬に造られては流れていく何か。耳から、舌から、目から、すべては瞬間に何かが生まれ、その一瞬たりとも留まらない創造物。それが瞬間芸術なのだ。

私は、時に音楽を人々に提供する意味を考える。喜怒哀楽、人間そのものを赤裸々に表現することが、要求される音楽。それは、まるでお芝居のようでもある。

さて、この日本において芸術や音楽は一体人の役に立つのだろうか、この疑問に私の思考は戻る。そのヒントは、人々にとって真の幸せ、幸福とは何かということではないだろうか。老若男女を問わず、心の虚実、虚無、不信、失望、無気力、絶望感といった世の中に横溢する気持ち。人への思いやり、優しさ、暖かさ、温もりを忘れ、今だけ、金だけ、自分だけといった人間の本性の嫌なところばかり目立つ世の中。真の幸せを見失いがちな環境にあって、その道標となるのが、音楽や芸術なのではないか、私はそう思うのだ。しかし、それはひと所に留まらず、一瞬一瞬流れ去る。だからこそ、私たち音楽家は止まってはいけないのだ。コロナウイルスが、その流れを止めようとも。

文化と歴史の宝庫、京都。そしてそこから生まれた技術とわが国独自の文化は世界に誇れるレベルだ。次に必要なのは、この文化を大切にする気風を持つことだろう。残念ながら、この点においては、まだまだわが国は後進国と言わざるを得ない。文化を軽んじる国家は、必ず滅びるのだ…。

コロナ禍、このウイルスは、さまざまな問いをわれわれに投げかける。

最後に、家族は私を真剣に偽善者！と笑う、笑。しかし、そうかもしれない…と問い直している。

◎1958年生まれ。84年第1回キリル・コンドラシン国際青年指揮者コンクール優勝。現在、京都市交響楽団常任指揮者として13年目を迎えている。京都市立芸術大、東京音楽大で後進の指導にも情熱を注ぐ。

◉各界で活躍する方々の「はじめる一歩」宣言を連日更新。あなたも「はじめる一歩」をシェアしませんか。
Twitter／Facebook：「未来のコンパス」で検索

企画・制作＝京都新聞COM